

緑の中の廃墟

一九七四年夏。

a

Hさん——たいへん長らくご無沙汰いたしました。いつぞやは暖かいお心のこもったお便りをいただきながら、返事もさしあげずまことに失礼いたしました。どうかお許しください。その後もお変わりなくご活躍のことと思ひます。

さて、だしぬけに失礼なのですが、Hさんは「オラドウール」というフランスの地名をお聞きになつたことがおありでしようか。

早いもので、今から三十年前の夏の日のことです、この地である事件が起りました。後にそれは「オラドウールの悲劇」と呼ばれることになるのですが、なにしろ、とるにたりない一寒村での事件でしたから、私の記憶に間違いがなければ、この事件の詳しい内容が日本に紹介され、それが大きな話題になることもなかつたようです。ですから、この際広くこの事件を紹介しておきたい、などと大それたことを言うつもりは全くありませんが、ただ何となく、三十年という年月が一つの区切りを意味することを考えますと、せめて第二次大戦末期のフランス僻村で起きたこの事件のあらまし程度のことは、誰かがどこかに書きとめておいてもよいのではないか、とい

う気はしないであります。

じつは後で申しあげるような理由で、三年前の夏、私はこの地を訪れました。その時以来、ある種のひそかな責務のようなものを感じてきましたので、一介の語学教師にすぎない私にとっては少し重荷なのですが、この事件の概要とその現場を踏んだ私の印象とを、Hさんにご報告しようと思います。もし幸いにして最後までお読みいただけたら、歴史家としてのHさんの率直なご感想をぜひお聞かせください。

では、オラドウールという名もなき小村がどこにあるのか、その辺りからお話しすることにいたしましょう。

フランスの地図を頭に浮かべていただきたいのですが、さてどこから説明すれば一番よくわかつていただけるか、と思案のあげく、落着くところがやつぱりパリだというのは、すでによく言われているところですが、フランスという国特徴の一つであります。地理的にみれば、パリはフランスの中心よりかなり北寄りに位置しています。しかし、古来この国には「パリ」に対立する概念として「地方」しかなく、リヨン、マルセーユ、ボルドーという大都會が存在するにもかかわらず、それらは政治、経済、文化、つまり諸事万般にわたつてパリに匹敵する存在にはなりえています。

中国近代史の専門家で、フランスの歴史、地理にも詳しいHさんには、まことに釈迦に説法といふところですが、最近の調査でもパリ地区の労働人口はフランス全労働人口の二一・五・パーセ

ント、しかし支払われた賃金の総計は全賃金の三五・パーセント、つまりフランスの全労働者の五人に一人がパリ地区で働き、しかも彼らの報酬は地方居住者の約一・五倍に当ります。さらに上級官吏、技師、大学教授、医師、作家、芸術家等のいわゆる「知識人」の約半数近くは、パリ地区居住者で占められているのが現状です。

もちろん、このような状態を改善すべしとする声は強く、「地方重点主義」「地方分権主義」の立場からする主張が活発に行なわれ、部分的にはそれが実行されていることも確かな事実です。日本の大都市ほどではないにせよ、交通渋滞、大気汚染、河川汚染等の公害の町と化したパリを避けて、理想の都市を地方に建設しようという呼びかけは当然すぎるほどのものです。巨視的にみれば、パリが今までののような特権的地位を今後も占めつづけることは困難で、地方の充実発展は抗しがたい歴史の流れであると思われます。

ところが、どうでしょう、私の見聞したかぎりでは、当分の間まだまだパリ中心主義は続きそうですし、地方分権論者の中には、微視的には前途に悲観的な人も少なくないようです。のつけから脱線するようて恐縮ですが、その理由を示すと思われそうな、一つ二つの挿話を申しあげることにいたしましょう。

私はフランス中西部のポアチエという中都市で一年ばかり生活した経験がありますが、その土地の本屋で面白い本を見つけました。その本の題名は『パリを脱出、ポアチエを選んで仕合せ!』という、日本ならばさしづめテレビのコマーシャルから飛び出してきそうな文句なのですが、読

んでみると、先程申しあげた二十世紀後半の脱工業化社会における理想都市の建設の地として、ポアチエが最適だという主張のようでした。

中世以来の大学都市として知られる由緒正しいこの町にも近年にわかつにその周辺にいくつかの工場が誘致されたため、いわゆるドーナツ化現象が生じ、町は周辺に向かって大きく膨脹しつつあります。間違いなくこの古い町も大いに変貌しつつあるのですが、それがはたしてこの本の著者のいう「理想都市」の建設につながるものかどうか、その辺の説明になりますと今ひとつ歯切れが悪く、本当にポアチエを選んで「仕合せ」なのか、私にはいささか疑問が残りました。むしろわざわざ仕合せを強調するところに、パリに対する抜きがたいコンプレックスが潜んでいるよう思えてなりませんでした。

パリ中心主義の根強さを示すと思われるもう一つのエ。ビソードはこうなのです。Hさんはひとりフランス共産党の理論的指導者のひとりとして鳴らしたロジェ・ガロディの名前を覚えておられるでしょうか。彼は数年前、党から一方的に除名され、従つて現在は党員ではありませんが、当人は自分こそ真正のコミュニストなりと称し、今も活躍し続けているようです。今後のことはわかりませんが、思想的には少年時代にカトリシズムの影響を深く受け、長じてマルクス主義に転じ、ご存知通りフランス共産党内でも重要な地位にいた人ですが、晩年は再びカトリシズムに近づきつつある——（シャルレアリストの中にも類似の遍歴をもつ詩人がいますが）——興味深い人物です。

ところが、じつはこのガロディの本職（？）はポアチエ大学の美学の教授なのです。私も何回か彼の講義を聴講しましたが、今ここで私が申しあげたいのは、彼独特の重厚な講義ぶりや学生に接するその態度についてというのではなく、久しくこの地の大学に奉職する身でありながら、彼がポアチエ周辺の居住者ではなく、パリ（正確にはパリ近郊）の住人だという事実についてなのです。彼は月曜日の早朝パリを発つて昼前にポアチエに着くと、その後と一泊後の午前中に講義、演習をすませ、火曜日の午後の列車でさっさとパリに帰ってしまうのです。

彼ほどの有名人なら当然ですよ、日本にも東京と九州を股にかけて活躍していたエライ先生がいるではないですか、と言われるかもしれません。そうです、あまり感心したことではありませんが、近頃では日本でも東京、京都と地方をかけもちの多忙な大学人が増えているようです。

フランスではこの傾向が昔からかなり強く、私がいくらか知る機会に恵まれたポアチエ大学の文学部関係の教官の約二割はパリに住んでいます。わざわざお断りするまでもなく、それらの教官諸公がすべてガロディほどの有名人だというのではありません。もっとも、優れた学者が有名人だとはかぎりませんから、このさい有名無名を問題にすることは間違っていますが、要するに大学の「かなめ」である教官のかなりの比率を占める人びとが、勤務する大学の所在地にではなく、パリに住んでいるところに問題があるのだと思います。これについて学生がどう思っているのか尋ねたことがあります。彼らの返事はいちように、すべての教官がポアチエ周辺に住んでくれる方が教育、研究上望ましいことは言うまでもない、しかしパリの魅力は絶大であり、そこに

住む便利さも捨てがたい以上、ポアチエに住むことを強要することはできない、じつはわれわれ自身ですら、将来できればそういう生活をしたいと思っている位だから、ということでした。

このポアチエ大学の例が、すべてのフランスの地方大学に共通する現象であるか否かは、今手許にその資料がないので申せませんが、パリに近ければ近い程、それに比例してパリへの依存度がより高くなるとみることは許されるでしょう。

ですから、「地方分権論者」が前途に対し悲観的になることはまゝあるとしても、無理からぬ点もある訳です。私がその中で生れ育った地方の言葉で申しますと、「地方がなにしたかてあきまへん。どないしてもパリにはかないまへんな！」とでも言うところでしょう。

少し調子にのりすぎてしました。仰々しくパリを登場させ、パリ中心主義とか地方分権主義とか自分でも一知半解の議論を構えましたのは、つまりはフランスのどの場所を説明するにしても、パリから出発するのが結局一番わかりやすい、というたつたそれだけのことを言いたかつたからにすぎません。

さて、パリから全フランスに放射状にのびている鉄道網のうち、中央部および南西部に向かう列車の主たる発着駅は、セーヌ左岸の植物園に近いオーステルリツ駅です。そこからオルレアン、ヴィエルゾン、シャトルーを経てボルドー方面に向かう列車に乗り、リモージュまでやつてきたと仮定してください。ボースの野、ソローニュの森、ベリ地方の田園を列車は通りすぎて進む訳ですが、これらの地方は、それぞれペギー、アラン・フルニエ、サンド、ジロドウというフ

ランス文学史にその名をとどめる作家たちを育てた土地です。車窓からの眺めを愛でながら、これら作家たちに思いをはせて文学散歩をするのも一興でしょう。

リモージュは人口約十五万、リムザン地方の中心地であり、昔から陶器の製造で知られた中程度の都会です。フランスのほど中央部のやゝ西寄りに位置していると言えましょうか。ここから東南部へかけて、いわゆる中央山塊地帯と呼ばれるかなりの丘陵が広がっています。さして高くはありませんが、川あり谷ありの起伏に富んだ地形で——（「水のお城」つまりフランスの「給水塔」とフランス人は呼んでいるようですが）——このことはこれから申しあげる「オラドウールの悲劇」とまったく関係のないことでもないようです。

ずいぶん廻り道をいたしましたが、やつと目的地に近づいてきました。オラドウールという村は、このリモージュから北西の方向二十数キロのところにあるのです。リモージュを旧広島市とすれば、オラドウールは可部の奥か安佐飯室といったところでしょう。

昔はこの村とリモージュを結ぶ軽便鉄道がありましたが、今はそれもなく、一日数本のバスが往来しているだけの、まことにつつましい一寒村にすぎません。

手許のミニュランの案内書（一九七一年版）によれば、この村の高度は海拔二百七十五メートル、人口千六百七十一人。村の近くを小さなグラーヌ川が蛇行して流れているところから、「オラドウール・シュル・グラーヌ」というのがこの村に与えられた正式の名称です。この地方には他にもオラドウールという地名がありますから、それとの区別のために「グラーヌ川にのぞむ」

というエピテートが必要なのでしょう。

柳とボプラに縁どられたこの渓流グラーヌ川は大ロワール河の支流ヴィエンヌ川のそのまま支流にあたり、ほとんど知る人也没有ですが、風景画家カミュー・コローが例の印象派の登場を予告するような筆致で描いたことのあるところです。

（オラドウール・シュル・グラーヌ）

三十年前の夏のある日、ここでいつたい何が起つたのでしょうか。

b

一九四四年六月十日、土曜日。

この日は朝から霧が立ちこめていた。昼近くになつて、やつとその霧が消えはじめ、朝から畠仕事をしていたらしい村人たちの姿が、オラドウール村の周辺のあちこちに見られた。午後一時を過ぎた頃、おそらくは食事のためであろう、村びとたちの姿はいつのまにか烟から消えていた。この村には二軒のはたご屋がある。そのどちらも鄙にはまれなうまい料理を食わせることで評判が高く、週末にはリモージュからわざわざ出かけてくる連中もいた。

そのひとつ、オテル・アヴィリの食堂ではこの日も二十人近い人たちが食卓について、運ばれてくる食事を待っていた。彼らは、主としてパリから、ランスから、レンヌから、戦禍を避けて

この村にやつてきた長期の泊り客たちで、たまたま通りかかった数名の近在の人たちがそこに加わっていた。さして広くはないこの食堂は、いつも通り満員の盛況であった。

別のひとつ、オテル・ミロールの食堂でも、やはり二十人ばかりの人たちが食卓をかこみ、ここですでに食事をはじめていた。

二つの食堂に集つた人たちの話題は、最近とみに変化を見せつつある戦局の話でもちきりであった。一週間前、ローマが既に連合軍の手に落ちたというニュースは、どこからともなく早くもこの村にも伝わってきていた。しかし、とりわけここに集つた人びとの興味と興奮を呼び起していたのは、どうやら四日前に連合軍がノルマンディに上陸したらしいという噂であった。

当時のフランスは、ストラスブール・ボルドーを結ぶ直線によつて、北のドイツ軍占領地区と南の解放地区とに大別されていた。オラドウールはほどこの境界線上に位置したが、もともとなきに等しい僻村であったおかげで、これまで一度も戦場となつたことはなく、そのためここには戦禍を受けた地区からの疎開者が、小村のわりには多く集つてきていたのである。

彼らにとつてはもちろんのこと、この土地の人たちにとつても、尊のノルマンディ上陸が真実

だとすれば、本格的な連合軍の反撃が間近いことは確実であり、ドイツ軍の敗北も遠い将来のことではないと思われた。人びとの表情はいつもよりはるかに明るく、食卓の間を人びとの交わす軽い冗談が往々来していた。

折悪しく奥さんがリモージュへ出かけたために、殊のほか忙しそうなミロールの主人も、いつなく上機嫌で、本日は皆さんに料理を一品サービスしましよう、と愛想をふりまいていた。客の中には、かみさんの留守にそんな豪気なことをしても大丈夫なのか、なんなら連合軍の上陸を祝して、とつておきのブドー酒もついでにサービスしたらどうだ、などと無責任な軽口をたたくものもいたが、聞けば今日この村にやつてきて、ここで食事をとるはずであつたりモージュの師範学校生徒十数名が、突然今朝になつて予定を変更したため、用意した料理があまつたのだとう。人びとは口ぐちに嬉しい悲鳴をあげていた。

午後二時十五分。この村のメイン・ストリートであるエミール・デズルトー通りに、突如聞きなれぬ異様な地響きが鳴りわたつた。それは二台の装甲車を含む十台近いトラックの一団が、猛烈なスピードでこの村になだれこんできたからであった。その主力は村の中央にある広場に停まつたが、数台は二手に別れて村の出入口を塞いだ。

トラックから降り立つたのは、完全武装したドイツ軍のナチ親衛隊に属する兵士たちであつた。異様な地鳴りを耳にしたその瞬間から、村びとたちは得体のしれぬ恐怖にとらわれ、不気味な沈黙がこの小さな村の上に重くのしかかつた。

沈黙の中で時が経つた。やがて村役場の広報係のドゥピエール・フィショさんの声が聞えてきた。それは少し震えていた。

「村民の皆さん、身分証明書をもつて全員直ちに村の広場に集合してくださいー」

村びとたちの多くは怪訝な面持のまゝ、重い腰をあげて服装をととのえ、身分証明書を確かめ

ようとした。早くもその時、銃剣をつけたドイツ兵が、各戸の入口の扉を蹴破って中に乱入していた。

病気で臥せっていた小学校女子分校主事のビネ夫人は、パジャマの上にマントをはおったまま、パン屋の親爺はメリケン粉だらけの上半身裸のまま、路上に放り出されていた。

午後二時四十五分、村の広場にはこの土地の人びとも、たまたまこの土地に居合せた人びとも、ほぼそのすべてが集められていた。小学校の男子分校、女子分校、それにロレーヌからの疎開児童のために設けられた特別分校の小学生たち総勢およそ二百名もそこにいた。唯ひとり、ロレンヌ組のゴドフラン君の姿だけがいつの間にか見えなくなっていた。しかし引率の先生もそのことに気づかなかつた。

この時、二、三の若者がやにわに広場の北側に広がる畑の方角へ向かつて走り出した。ドイツ兵の機関銃が直ちに火を吹いた。あつという間の出来事であつた。村びとたちは倒れた若者の運命が自分たちの運命と無縁だとは決して思わなかつたが、さりとてどうすればよいのか見当もつかなかつた。

そのうち、オラドウールに隣接する村の人びとが次々とトラックで運ばれてきた。女、子供たちの多くは泣いていた。恐怖のあまり口もきげず、ただこきざみに身体を震わせているものもいた。

やがて、広場に集められた人びとの周囲を取り巻いていたドイツ兵の中から、ひとりの将校が

進み出ると、村の責任者デズルトー氏に「三十名の人質を指名せよ」と命じた。村長はしばらく考えているようすであったが、やがて静かに答えた。

「人質が必要ならば私がなりましよう。もし私以外にも人質が必要ならば、私の家族を逮捕してください。それ以外の人質はお断りします。」

将校は威圧的な大声で、なおしばらく村長と押問答を重ねていたが、やがて彼を突き飛ばすと村人たちに向かつて言つた。

「この村には〈テロリスト〉たちが隠している武器弾薬があるはずだ。その保管場所を知っているものはつづみ隠さず直ちに述べよ。申し出がなければ、事實を隠しているものとみなし、われわれは断固たる報復を行う。わかつたか。」

村びとたちの中からひとりの男が進み出ると、「わしやカービン銃を一丁持つりますが、県の許可をもろとりますで」と言つた。ドイツ兵は、そのような小物を探しているのではないと怒鳴り返した。

これ以外に村びとたちからの供述はえられなかつた。彼らに他意はなかつた。なぜなら、ドイツ兵のいう、いわゆる〈テロリスト〉がレジスタンス運動の参加者であることを村びとたちは知つてはいたものの、〈テロリスト〉たちはまだこの村には一度もやつてはこなかつたし、ましてや武器弾薬が隠されていることなど夢にも知らなかつたからである。

午後三時、ドイツ兵は広場に集めた村びとたちを成年男子組と女子・子供組とにわけ、まず女

子・子供組をグラーヌ川に近い教会へ連行した。夫や息子たちとの別れに、ますます不安を搔き立てられた女たちの中には、失心して倒れるものが続出した。小学生の顔にも濃い不安の色は隠しきれなかつたが、ドイツ兵の銃剣と先生たちの必死の誘導が、からうじて暴発しそうな混乱を未然に防いでいた。

三十分後、ドイツ兵はこんどは男子組を更にいくつかの小グループにわけ、彼らを村びとたち所有の七つの納屋、倉庫、車庫に閉じこめた。その入口には軽機関銃をもつた五、六名のドイツ兵が立ち、銃口を村びとたちから離さなかつた。ここでも、二、三の若者が、ドイツ兵のわざか隙に乗じて逃亡を計つたが、成功しなかつた。二十歩進まぬうちに、砲火の一斉射撃を浴びて、彼らの肉体は地上に倒れていた。

およそ午後四時、広場に残っていたドイツ兵のひとりが、その銃口を空に向けて引き金をひいた。

この銃声を合図に、納屋、倉庫、車庫そして教会の入口を固めていたドイツ兵たちの銃器は一斉に火を吹いた。狂ったドイツ兵たちには軽機関銃の乱射だけでは十分ではなかつた。やがて彼らは、村びとたちが折り重なつて倒れたその場所に四方から火をつけた。運よくドイツ兵の銃撃をかわし、今の今まで親、兄弟、姉妹、息子であつた人たちの屍の蔭にかくれて息をつめていた人たちも、あるものは火炎にのみこまれて息絶え、あるものは火を避けようとして身動きした瞬間、待ちかまえていたドイツ兵の餌食となつて倒れた。

それでもローディの納屋に押しこめられた村びとたちの中の五名は、重傷を負いつつ、ともにかくにも生きのび二日後に救出されることになる。だが残る六つの納屋、倉庫からはひとりの生存者も数えることはできなかつた。

一方、教会では推定五百名近くの婦女子が閉じこめられ、撃たれ、焼き殺された。死を直前にした彼女たちの阿鼻叫喚は、オラドウールの周辺二キロにわたつて、地を這うように広がつた。ここでは、アリアドネーの糸に導かれたテーセウスのように、文字通り奇蹟としか言いようない偶然に導かれて、たつたひとりの婦人だけが、この焰の地獄から抜け出し、近くの畠に身をひそめているところを発見され、救出された。それはやはり二日後の夕刻のことであつた。しかし当時四十七歳のこのルーフランシュ夫人は、その代償として夫、息子、二人の娘、七カ月になる孫のすべてを失つていた。

たとえわずかとはいゝ、このように思われぬ生存者を出したことは、ドイツ軍の大きな誤算であった。彼らの予定表には、恐しいこの事件の目撃者であり生きた証人となる生存者はひとりもないはずであった。なぜなら、納屋、倉庫、教会に火を放つたその時、別のドイツ兵は村中の家々に火をかけ、病氣のため広場に出られなかつた人たちを含め、すべての生きものを容赦なく殺戮していたからである。ミロールの食堂で昼食をとるはずであつたりモージュの師範学校生のような幸運な例外もあつたかわりに、サイクリングの途中、たまたまこの場を通りかかつた、同じリモージュの学生数名には、この村びとたちと同じ運命が待ちかまえていた。夕方、リモージュ

から帰ってきた例のミロールのおかみさんも、グラーヌの川を渡つて村に入らぬうちに、監視のドイツ兵に撃たれて殺されてしまった。

日が沈む頃、オーブの烟にあつた深い井戸は、ドイツ兵の手で投げこまれた死体で埋まつた。道路わきの溝にも血にまみれた屍が累々としていた。

夜が訪れると、村中の家々から吹きあげる火の粉は、勢よく空に舞い上つて夜空を焦がし、そして闇の中へ消えて行つた。

不思議なことに一軒の家だけが、この一斉放火の対象から除外されていた。それは軽便鉄道の駅前近くの裕福な服地商人デュピック氏の店であつた。そこには高価な服地はもちろんのこと、かなりの宝石類と店主ご自慢のブドー酒貯蔵の地下室とがあつた。

午後八時、燃え続けるこの村からナチ親衛隊の一部が引きあげると、残つた兵士たちは、わざと残しておいたこのデュピック氏の家に集り、次の日の朝まで酒池の中に溺れこんだのである。やゝ肉林に事欠いたらしいのが、思わぬ生存者を出したことと共に、演出者の犯した数少ないミスであったのかも知れない。

翌朝十一時、二つのトランクに宝石類をつめこみ、トランクに乗りこんだ彼らは、オラドウールでの狂宴の一晩の宿にも、容赦なく火を放つことを忘れなかつた。しかし、火はすべてをなめ尽す業火とはならず、彼らの所業を完全に焼き消すことはできなかつた。こじあけられた宝石箱、飲み干されたブドー酒樽、散々する多くのグラスが地下室から発見された。

さらにその翌日の六月十二日、午前一時、再び舞い戻つたドイツ兵の一団は、深夜の暗闇の中で二つの大きな溝を掘り、そこに路上に捨てられていた死体を集めて埋めた。近づく人の気配を感じると、彼らは闇に向けて狂つたように機関銃を乱射した。

事件後、まる二日経つてオラドウールの村にはじめて以前の静けさと平和が甦つた。

死者総数六百四十二名。そのうち身許確認された遺体わずか五十二体。その他はこの事件による行方不明者として公式に処理されたものの数である。犠牲者はすべて非戦闘員であった。生存者、男子若干名、女子一名。それにもう一名、広場に姿を見せなかつたロレーヌからの疎開少年ゴドフラン君がいた。彼は故郷ロレーヌでの体験から、武装したドイツ兵が何をするかを鋭く知つていた。ドイツ兵が学校に姿を見せた瞬間、彼は本能的に逃げていた。まず便所に身をかくし、その窓から裏庭に出た彼は、雑木林の繁みにひそみ救助されるのを待つていたのである。

この事件から約七十五日後、連合軍の手によりパリは解放された。翌年四月三十日、ヒトラーは自殺し、五月八日ドイツは正式に降服した。

それから三ヵ月後、広島の頭上に一発の原子爆弾が炸裂した。

c

Hさん——一九七一年七月のある日、私はこの惨劇の悲しい舞台となつたオラドウールの村を

訪れました。

この小さな村を訪ねたいと思うに至ったについては、二つの理由があるのです。

私はロベール・アロンという歴史家の書いたものを通してはじめてこの事件を知ったのですが、その後多少の文献を調べているうちに、破壊しつくされたこの村全体がじつはそのままの形で保存され、戦後のオラドゥール・シュル・グランヌはその廃墟の傍らに新たに建設された町であることを知りました。人間の狂氣と愚行を伝えるこの廃墟が、三十年近い歳月の風化に耐えて今何を私に語りかけてくれるか、他ならぬ私自身の感覚を通してそれを確かめておきたい、そう思つたのがまず第一の理由なのです。

第二の理由は少し長くなりますが、こういうことです。はじめに話題に供しましたボアチエの町で、私はあるフランス人の学生と知り合いになりました。彼は私が広島から来ることを知ると、ヒロシマに投下された原爆をめぐって、いろいろな議論を吹きかけてきました。正直なところ、私は困惑しました。なぜなら、私は確かに広島の居住者ではあるけれども、数年前に大阪からやつてきた他所者にすぎず、私自身が原爆の洗礼を受けていないばかりか、近親者にも被爆者ではなく、またこれまでいかなる形であれ原水禁運動に参加したこともないですから、そういう意味で、私は原爆や平和問題を語る資格の微塵もないことを痛切に自覚していたからです。

しかし、その学生にとって現にヒロシマに住んでいる私は、少くともヒロシマ以外の土地からフランスにやつてきている日本人に比べて、核問題に関する深い知識となにがしかの傾聴すべき

見解をもつてゐるはずだと映じたのでしよう。困惑している私にはおかまいなく無遠慮に私の内心に入りこみ、ささやかな私の心の平和を平氣でかき乱すのでした。結局、私は現に私が広島に住んでいるという動かし難い厳粛な事実に敬意を表し、そのことはやはり少なからぬ縁あるものと思い諦め、そう自分を納得させて私なりに持つてゐるつもりの——じつはあまりにも貧弱な、あまりにも偏見にみちた——知識と見解をもとに、この若い学生の質問に応じていきました。

その学生が、ある時、オラドゥールの悲劇をどう思うかと尋ねたのです。私は戦争という異常な状況が人間をどれだけ狂気に走らせうるかを示す一例であろうと答えました。この返事に対して彼は格別の異議を唱えませんでしたが、このオラドゥールの悲劇とヒロシマの悲劇とは、その規模の大小を別とすれば、どこがどのように異なるのか、とたたみかけてきました。私には早くも確固たる自信は失われていましたが、この二つの悲劇を隔てるその規模の大小こそ、じつは問題の重要な核心であり、ヒロシマの悲劇はいわば全人類の破滅を予告する象徴的なものであるが故に、より深刻なのだと思うと答えておきました。

幸い彼はこれ以上私を深追いすることをやめ、そうかもしれないといったふうに一、二度うなづいてみせてくれましたが、一度オラドゥールの廃墟を見ませんか、どのような印象を持たれるか興味もあるし、と私にオラドゥール行きを薦めてくれた訳です。

こうして私のオラドゥール行きは実現することになったのですが、この青年が私にただしたヒロシマの悲劇とオラドゥールの悲劇を峻別するものは何かという問いかけは、いつしかトゲのよ

うに私の心に刺さっていました。

——オラドウールとヒロシマの二つの悲劇は、彼の言う通り規模の大小を問わなければ、いつも戦争という苛酷な状況が生みだしたもつとも非人間的な行為だという点では一致している。にもかかわらずヒロシマの名はアウシュヴィツの名と共に世界に喧伝されているのに反して、オラドウールの悲劇についてはその事実を記憶する者の数すら恐ろしく少ないというのはなぜだろうか。オラドウールの悲劇が核兵器を持たぬ、いわば古典的戦争とでも呼ぶべき争いの場で、たえず繰り返されてきたありふれた残酷行為にすぎないからであろうか。どのような民族抗争の歴史の中にも、確かにオラドウールと類似の悲劇があつたことは否めない。他民族のことはさておき、われわれも近い過去において、朝鮮、中国、フィリピンその他の異国で何度もオラドウールを出現させてきた。この事実はしっかりと確認しておかねばなるまい。ヒロシマの名が世界的に高まり、ヒロシマこそ戦後の平和運動のメッカ、新しい平和の原点よともちあげられていることに私がケチをつける筋合は毫もない。しかし、そのことがオラドウールの悲劇の意味を矮小化し、われわれの犯したオラドウールを不間に付すことであつてはならない。そうだとすれば、この二つの悲劇を真に隔てるものはあるのか、あるとすればそれは何か——フランス人学生の投げかけた疑問は、はてしなく私に問い合わせ続けるのでした。

日本人の友人二人と車を借りて、早朝七時にポアチエを発った私たちは、途中ジロドゥの生れたベラックの町を一巡し、九時頃、目的地に着きました。

ちょうどこの日も、かなり深い霧が立ちこめていました。それは、この眠ったような僻村に多少とも特別の関心をいたいた私に対する無言の、しかし丁重な出迎えのようでした。

廃墟の入口に近づきますと、この村の所在を示す標識が霧の中から白く浮かびあがてくるのが目に入りました。（オラドウール・シュル・グラーヌ）という三つの文字が、二本の杭に打ちつけられた粗末な一枚の板に書かれていました。そのまま下の同じように粗末な板の上に、（思い出してください）という言葉がフランス語と英語で記されていましたが、これを見た瞬間、ある種の緊張感に私の身体が小さく震えるのを覚えました。このフランス語にして二語（スヴィヤン・トワ）、英語にしてたった一語（リメンバ）の言葉は、廃墟の中の別の立札に記された（沈黙！）（シランス）という言葉と共に、私に思いもかけなかつた清冽な印象を与えてくれました。広島の居住者である私は、当然のことかもしませんが、広島市内の各所に建てられた多くの記念碑を思い浮かべました。しかしそのどれひとつとして、この廃墟の中の立札のように粗末なものはありませんでした。私の思いはいつしか平和公園の中心に設けられた原爆記念碑の有名な文言へと移つていきました。

「安らかに眠つてください 過ちは繰り返しませぬから」

この碑文にはじめて接した時の私は、まだ学生だったせいでどうか、深く感動しました。

今その理由を考えてみると、碑文の前半部の原爆犠牲者の靈に対する鎮魂の願いが、後半部の静かなしかし牢固たる不戦の誓いに、しっかりと支えられていました。そこには、

未曾有の惨禍を生きのびた人びとの敬虔な祈りと、不退転の決意のようなものが滲み出でていました。日本語特有の主語を欠いたこの文章は、まさに主語を明示しないというそのことによって、碑文の前にぬかずくんびとを大きく包みこみ、大理石に深く刻まれたこれらの言葉を、訪れるすべての人びと自身の発する言葉に変えていたのだと思うのです。

ところが、今オラドウールの廃墟に立って、そこにやつてくる人びとにひたすら「沈黙」を求めて、かつてこの地で起きた事實を「想起」することのみを訴える、いたって粗末な木切れの立札に接してみますと、まず最初の卒直な印象として、広島の碑文が少し立派すぎて面映ゆいという気がいたしました。もちろん、過ちは繰り返してはならぬ、といまでも私は思っていますが、さりとて、そのために実際に何をしてきたのかと問われて、「無」という答しかできぬその事が、私を後めたくさせ「面映ゆく」させたに違いありません。と同時に、自分のことは棚にあげ他人の非をあげつらう愚を犯すつもりはありませんが、原爆投下後のあの荒涼たる終末論的な焦土の上に立って、あれほど深く、あれほど強く肝に銘じたはずのわれわれの「過ち」が、わずか三十年経つか経たぬかの間に、かなり多くの人びとにとっては、深刻に反省すべき過ちではもはやなくなってしまったらしい、という慄然たるわが国の現状とも無関係だとは思えません。

オラドウールの廃墟の北西の入口から中に足を運んだ私たちは、放火後のドイツ兵たちが狂宴の一晩を過したデュピック氏の家の前を通り、軽便鉄道の小さな駅跡を過ぎると、右に折れる小径を通つて、死体で塞がれていたオーズの井戸を覗きました。それからこの小径を再びとつて返

し、村の広場にやつてきました。

私の脳裏には、この広場に集められた六百余名の村びとたちの恐怖にひきつった顔、逃亡しかけて即座に射殺された若者たちの地上に伏した姿、銃弾と火炎の中で空しく救いを求めるづけて死んでいった婦人や子供たちの、のたうち、もだえるさま、報復の快感に酔うというより、むしろ恐れとひそかな悔恨に苦しめられたドイツ兵たちの異様な形相、夜空を焦がして燃えあがる炎、音をたてて崩れていく家々などが、絞切り型ですが、文字通り走馬燈のように去来しました。

ところが、この私の思い入れも、同行していた友人のひとりの「思つていた程でもないなあー」という軽い一言で、まるで背後から冷水を浴びせられたように、しほんでしまいました。この友人はオラドウールに特別の関心を示さない多くの人びとのひとりでした。彼がこの村について知っていることは、ポアチエからここにやつてくる車の中で、問われるまゝに私が答えた事件のあらまし以上のものではないのですから、彼がどのように豊かな想像力の持主であろうと、この廃墟の中に恐れおののく村びとたちの表情を見つけ、火炎の中からほとばしりでる阿鼻叫喚を聞きわけることはできなかつたのでしよう。そのことで彼を責めるつもりは私にはありませんでした。

ただ、この友人に對してさしたる印象を与えなかつたらしいオラドウールの廃墟が、私には惨劇の場面をヴィヴィッドに再現してくれたという事実から、私は記録されたものの重要さと、それを学ぶことの必要性とを改めて痛感いたしました。なぜなら、彼と私とを隔てていたものといえば、彼に比べて私がいくらかセンチメンタルだという一面を除けば、私の側にこの事件に寄せる

より多くの関心があり、その関心の赴くまゝにいくつかの資料や文献に眼を通していた、ということだけのことに尽きるのですから。ともあれ、村の広場から教会へ向かって私たちが歩きはじめると、折しもそれまでこの廃墟を覆っていた霧が散りはじめ、七月の陽光が雲間から洩れきました。薄靄のヴェールにかわってこの死の空間を包んでいたものは、厚い幾重にも層をなした樹木の緑でした。その緑の中では、村全体が事件当時のまゝ保存されたオラドウールも、まるで巨大な樹海にとりのこされた小さな孤島のようでした。それは恐るべき時間の風化作用の前に、無防備のまゝ放置されているようでもありました。ビルが林立し活力に溢れる今日の広島で、原爆体験が風化し忘却の彼方へひたすら押し流されていきつゝあるやに思われるのも、この廃墟のことを思えば当然なのかもしれません。

しかし、それは忘却が時間の函数だという意味でのみ言っているのではありません。人為の及ばぬところに由来する運命的な不幸から人間が解放されるためには、確かに時間を函数とする忘却の力に頼らなければならないでしょう。しかし、他ならぬ人間がその原因を作り、対処する人間しだいでは避けえたかもしれない不幸について、その不幸の原因を探り、その正確な実態を調査し、その上で責任を厳しく追求するという当然の義務が、ヒロシマの不幸については今なお十分に行なわれていないまゝに——と言うよりは、敗戦国としてさまざまの無理からぬ理由もあつたとはいえ、率直なところ権力者の側にその義務を忠実に履行する意志がないという事情がある以上、忘却のテンポが異常に早められ、人為的に加速されつつあるのも当然だろうという意味なのです。

皮肉を言うつもりはありませんが、原爆被爆という「悲痛な事実を後世に伝え人類の戒めとするため」、世界の平和を願う善意の人びとの寄金によって補修され、「永久に保存」されることになつた原爆ドームをもつてしても、この滔々たる無気味な時の流れを塞き止めることはできないでしょう。この「補修」されたドームの前に立つて、絆創膏のような合成接着剤が破れたクモの巣のように壁面を這いつりまわつているさまを見る度ごとに、からうじて自然の崩壊を食いとめた代償として、拭いがたい人工の醜さを残してしまったことが私には惜しまれなりません。形あるものはいつか必ず滅びるのであるから、自然の残骸はそれが滅びるにまかせる以外に途はないのでしよう。平凡な、すでに言いふるされたことかもしませんが、敗戦直後の原爆ドームの姿は、われわれ人間の心の中にそのままの姿でとどめておくのでなければ意味はありません。滅びぬドームを心の中に築く、このことは口で言う程たやすいことではないでしょうが、補修されたドームにその力がないとすれば、その難事をわれわれ各人が行なう以外にどういう方法があるのでしようか。

オラドウールの廃墟で私たちが最後に訪れたのは、もつとも多くの犠牲者を出した教会でした。十五世紀に建立されたというこの教会は、かなり広々とした内陣を擁していたはずですが、残っているものは外壁だけで天井はすべて落ちていきました。六月十日のあの事件さえなければ、今まで日曜日ごとに敬虔な信者たちがここに集つていたに違いありません。黙つて教会を一巡した私

たちは、その前の坂道を下ってこの廃墟の東の出入口にやつてきました。グラーヌの流れはそこから数歩のところにあり、緑のポプラの樹影が静かな水面にかすかにゆらめいていました。

この岸辺でしばらく休憩した私たちは、やがてこの廃墟に別れを告げたのですが、それにしてオラドウールというこの地名が、ラテン語で礼拝堂を意味するオラトリアムから由来するものであることは、何という運命のいたずらでしょうか。安易に「運命」という言葉を使用することに私はかなりの抵抗を感じます。しかし、連合軍のノルマンディ上陸作戦と呼応して活発化した対独地下抵抗者たちのゲリラ活動——アンドレ・マルローが数カ月後に結成することになるアルザス・ロレーヌ軍団のマキの人びとが活躍していたのも、じつはこの地方からペリゴール地方一帯にかけてでした——に業を煮やしたドイツ軍が、その報復の舞台として数ある中からこの村を選んだというこの事実は、何の根拠もなく選ばれたオラドウールの村びとたちにとっては、やはり「運命」としか言いえない性質のものだったと言うほかはないでしょう。

Hさん、オラドウールの廃墟に別れを告げたこの時点で、私のこの手紙も当然終りにすべきところですが、最後にもう一言つけ加えることをお許しください。すでにお気づきかもしませんが、この手紙の中で私がわざとらしく自分を広島の「居住者」と断りつづけていることに、Hさんは少しご不満ではないでしょうか。

広島で生まれ育ち、この地の大学を出、被爆の体験もあるHさんのご指摘を待つまでもなく、ヒロシマの問題は一被爆者の問題、広島を「わがまち」と呼ぶ人びとだけの問題にとどまらない

ことを私が知らない訳ではありません。「ちちをかえせ　ははをかえせ　としよりをかえせ　こどもをかえせ　わたしをかえせ　わたしにつながるにんげんをかえせ　にんげんの　にんげんのよにあるかぎり　くずれぬへいわを　へいわをかえせ」という悲痛な叫びは、まさに「にんげんのよにあるかぎり」忘れてはならないものです。

しかし、にもかかわらず私が私自身を広島の居住者以外のものと決して考ええない主な理由は、私がかりにどのように原爆問題とそれにつながる平和問題に関心を抱こうとも、所詮は広島を故郷とし被爆体験を重ねた人びとの微妙に屈折した内心の隠された變のようなものを、十二分に理解することはできないと思つてゐるからなのです。

Hさん、少し話が飛躍しすぎるように思われるかもしれません、生前のパスカルがトゲのようになさくれだつた鉄の帶を着用していたことをご存知でしょうか。これまで私はこの帶の意味を、パスカルにとつてともすれば眠りこもうとする精神を呼び覚す鞭のようなものだと理解していました。いくらかマゾヒスト的なこの行為に好感を寄せるとはできませんでしたが、パスカルのような天才をもつても、湧き起る自己愛を抑えるためには「罪あるからだ」を痛めつけなければならなかつた、という事実に強い印象を受けたことは確かです。ところが最近の私には、この鉄の帶がもう少し別の意味をも含んでいるのではないかと思えてきました。私の思い過しかもしれませんが、それはこうのことです。

人間にとつての不幸は、例えてみれば生身の肉体が受けた血の流れる傷のようなものだと思います

ます。その傷が深ければ深い程、熱心に人間はその原因を探り、二度と同じ傷を受けまいと決意し努力します。しかし、ひとたびその傷が癒やされるや、もともと怠惰で傲慢な人間は傷を受けたことすら忘れかねません。傷を受けた人間がそれが原因で死ぬのでなければ、まず受けた傷を治さなければなりませんが、治れば傷を忘れるという悪循環を繰り返すことは避けなければならぬでしょう。まだしも傷を受けた當人にとっては、幸か不幸かは別として、受けた傷の深さに応じた傷跡が皮膚の表面に残るはずです。それは場合によつては、忘れようとして忘れることができぬしるしとしてその人を苦しめるかもしれません。しかし直接傷を受けず、従つて傷跡を自分の肉体に持たないものが、かりに身近に深傷を負つた不幸な人をみ、その人の不幸を自分のものと激しく自覚したとしても、それだけではたして本当にその人の不幸を理解していると言えるのでしょうか。

そこで私は考えるのですが、かりに傷を受けなかつた人間にも傷を受けた人間の不幸を共有する方法があるとすれば、それはたつた一つ、自らの意志で自己の肉体に同じような傷を刻むことをおいて他ではない、と思われるのですがいかがでしよう。たとえば春琴のために自らの目をつぶした佐助を想起してください。このように唐突に谷崎とパスカルを対比することには問題があるかもしれません、パスカルにとっての鉄の帶は、精神をつねに覚醒させると同時に、じつは他人の不幸を自らの痛苦とするための唯一の道具だつたのではないかという気がするのです。そして佐助を被虐的な行為に駆り立てたものが春琴に対する深い愛であったように、パスカルにあ

のトゲのような鉄の帶をあえて着用させたものも、人間の不幸に対する測りしれない愛——狂気としか呼びようのない愛——に他ならなかつた、と私には思われてならないのですが、Hさんはこの点についてどのようにお考えでしようか。

お断りするまでもなく、私はパスカルのような天才とは縁なき衆愚のひとりであり、彼がいたいた激しい信仰心とも無縁の凡夫にすぎません。ですから、自ら生身の肉体を傷つけるなどといふ果敢な、凄絶な行為ができるはずもありません。私が私自身を広島の单なる居住者、いつかはこの地を離れてしまうかもしれない通行人、としか呼びえないのも、じつはこのことに起因しているのです。私には本当のヒロシマの痛みも苦しみも、そこから派生する諸問題も、自己の肉体にその傷跡を残すものとして理解することはできません。オラドウールの悲劇についても同様のことことが言えると思います。

誤解を招いてもいけませんので補足いたしますと、被爆体験者でなければヒロシマの痛苦はわからぬ、だからそれ以外のものはヒロシマの問題について発言してはならぬ、と言つてゐるのではありません。現に私自身が今ここでそれをしているのですから、それはおわかりいただけます。ですが、ただ世間には、あまりヒロシマと関わりがあるとも思われない人びとが、あたかもヒロシマを自己の肉体にしるされた傷口のように語るのを見かけるものですから、私としては自分の立場を明確にしておく義務があると考えたまでのことです。

最後になりましたが、ヒロシマとオラドウールの悲劇は何がどのように異なるのか、という例

のフランス人学生の質問に私はどう答えるべきなのでしょうか。恥ずかしいことですが、私には確信ある解答が今だにできないままの状態が続いている。オラドウールの廃墟からは「オラドウールよ 恐怖の名よ オラドウールよ ぼくにはできない 近づくことが おまえの傷に おまえの血に おまえの廃墟に……」というジャン・タルデューの詩が生まれましたが、それは「ちをかえせ ははをかえせ」ほど知られているとは思えませんし、この地で世界の平和会議が開かれたというニュースを聞いたこともありません。さりとて、この小さなフランス中西部の一農村の悲劇のもつ意味が、その本質においてヒロシマの悲劇の意味に劣るとも思えないのです。そこで私にとってのオラドウールは何かを考えてみると、それはHさんのご専門に関わることであります。われわれが近い過去において近隣の異国民——（その中には沖縄の人びとをも含めて考えるべきかもしれません）——に強いたオラドウールの苦しみを見直し、今の時点でそれが可能か否かは判然とはしませんが、それなりの責任をとるべきことだと思われるのです。この点を出発点とする時はじめて、私にとってヒロシマの問題が「人類の戒め」としての意味を持ちうるのではないかと思っています。

オラドウールの廃墟の「訪問者」、広島の「居住者」にすぎない私が、私としては全く異例のこのような長文の手紙をHさんに差上げることになったのは、とりもなおさずこの二つの悲劇が、今後の人間の存続との関わりにおいて投げかけた問題の大きさを示していると言えるでしょう。同時に、Hさんと私とのごく個人的な関係において言えば、生粹の広島人であり、しかも冷徹

な史眼を具えた歴史家であり、ヒロシマのかかえる諸問題の真の数少ない理解者のひとりであるあなたに対しても、いわば広島にとって他所者であるにすぎない私が、やや大袈裟にひびくかもしれません、私なりに一度はしておかなくてはならない、私にとってヒロシマとは何かという信仰告白のようなものです。広島にやってきて住みつくようになつたという一事さえなければ、私がこのような手紙を認めることすら多分なかつただろうと思います。このことに免じて、ご不満の点はご寛恕ください。

それにしても、今の私は正直なところある戸惑いに直面しています。それは、柄にもなくヒロシマの問題について発言してしまったことに由来しているのだと思います。これまでの私はこの種の問題を避けるように自分に言い聞かせてきました。じつは、オラドウールを訪れる前にも、ポアチエの町の「平和主義者」と称する小さなグループから、ヒロシマの話をしないかと誘われたことがありました。お断りしました。そうした話をする資格は自分にはないと思っていたからに他なりませんが、それでは、いつたい私はどんな留学生活を送っていたのでしょうか。自分のことを直説法で語るのはいささか恥ずかしい気がしますので、下手な小説という形で、いずれその一端をお知らせすることにいたしましょう。もし幸いにして最後までお読みくだされば、またつかその感想でもお聞かせいただければと思っています。

では又。お元気で。